

# 武汉大学留学報告書

131106

医学部 5 年 古川 義浩



## 1.始めに

2月20日から3月29日まで39日間私は武漢大医学部へ留学行かせていただいた。この報告書では留学中の学習や中国での生活および私が感じた中国と日本の相違点や共通点について報告する。

## 2.武漢市および武漢大学について

### ・武漢市について

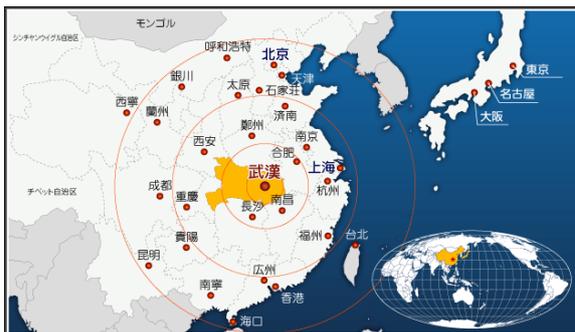
名称 武漢市（中国語 武汉市、英語 Wuhan）。

時差 日本より1時間遅い。

人口 1000万人以上

面積 8467平方km

備考 中華人民共和国中部、湖北省の東部であり同省の省都である。華中地域ないし揚子江中流域全域の中心都市であり経済的重要性から副省都市に指定されている。長江および漢水を挟んで武昌、漢陽、漢口が並立している。また、東西南北に鉄道や河川あるいは空路が走り、交通の要所になっている。



(図1 武漢市 引用 <http://www.wuhan-syspro.com/about/>)

現在も都市開発が進んでおり私たちの大学近くにも数多くの高層ビルが立ち並んでおり、また開発中の高層ビルも数多く存在した。海外企業の進出が多く経済都市としての成長段階を目の当たりにした。

### ・気候

日本と比べ寒暖の差が激しく、夏には猛暑となり七月の平均気温は29.1℃と高く40℃近くまで達することがある。重慶、南京と並んで三大ボイラー都市と呼ばれている。武漢大学の学生も口をそろえて皆「留学が夏でなくて良かったね」と言っていたことが印象深い。

### ・経済面

華中地区最大の工業都市であり、2016年の国内総生産では中国国内で9位であった。

商業面は武漢市を中心に、湖南・江西・安徽・河南を含む華中地区全域に発展しており、年間商品売上が華中では第一位を占め、小売業では漢正街など華中最大の商業集積地を有しており、最近では商業施設が更に健全化し、高速道路網、新幹線、都市間鉄道、インフラなど整備され、武漢都市圏の消費マーケットは湖北省のみならず、湖南・江西・安徽・河南

全体に影響を及ぼすほどの規模にまで拡大している。また、郊外や新都心にもイオンやイケアなど大手ショッピングセンターが開業され、都心部との競争も激しくなっている。華中地域においては武漢市の商業は圧倒的な優位性を有している。

#### ・教育

国立大学が 8 校、他の公立大学が 22 校、私立大学が 6 校あり、短期大学含め 82 校ある。大学及び短期大学の学生数は 95.68 万人、大学院生数は 11.27 万人、中国で 1 位となる。このように経済面、教育面でのかかなり高レベルな都市である。また高層ビルの開発が進む一方黄鶴楼や宝通寺など文化遺産も数多く現存しており有名な観光スポットとなっている。今回訪れた観光地に関しては後述する。

#### ・武漢大学について

武漢大学

簡体字 武漢大學

Wuhan University

場所 中華人民共和国湖北省武漢市

学生数 31886 人

教授 1344 人

留学生 1577 人

職員 4013 人

建築面積 389 万平方メートル

備考 中国で最も歴史がある国家重点大学の一つである。大学の略称は武大（ウーダァ）。前身は清代の 1893 年に張之洞により創立された自強学堂。辛亥革命の後北洋政府がそれをもとに 1913 年国立武昌高等師範学校を創立する。当該大学は、1928 年 7 月に国立武漢大学と正式に名称が制定された。1952 年、中国高校院系の調整により、武漢大学は中国国家教育部直属の総合重点大学となった。

2000 年、武漢水利電力学院、武漢測繪技術大学、湖北医科大学と合併し、新しい武漢大学となった。

武漢大学は 30 種類の学部があり、様々な分野についてのプログラム、例えば、科学、技術工学、農業、医学、文学、歴史、哲学、法律、経済学、教育学、経営学などについてのプログラムを提供している。(参考 Wikipedia 武漢大学

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A6%E6%BC%A2%E5%A4%A7%E5%AD%A6>

最終アクセス日 2017/3/16)

メインキャンパス内には学生寮に加えある程度の生活は大学内で事足りるよう商店や美容室、レストランなどが揃っている。また学生が無料で使用できる運動場が複数個所存在し地域住民も利用しているようである。キャンパス内は広く徒歩で回り切るには二日以上時間を要するらしい。そのためキャンパス内にはバスが運行している。またキャンパス内に

は大日本帝国陸軍が駐留時に植樹した桜が多数存在し、春になると大量の桜が咲くため桜の名所として観光地となっている。また留学生の数が多く日本は勿論、韓国やインド、マレーシアなどアジア諸国や欧米からも留学生が来ている。



(写真1 メインキャンパス)



(写真2 メインキャンパス 桜)

医学部キャンパスについては以下。

医学生数

学生 2229 人

修士課程 2032 人、

博士課程 561 人

留学生 652 人

備考 中国では一般的に 5 年間の学習を経て医師となれる。その後臨床に出る場合もあれば 3 年間日本の大学院に当たる機関で学び研究員となる場合もある。なお中国では臨床よりも研究医の方が重要視されている傾向が強いという話であった。

私たちが滞在した医学部キャンパスはメインキャンパスから東湖を挟んだ対岸にある。規模は福島県立医科大学と比べはるか大きい。また食堂も二つありウイグル自治区やインドからの留学生もおおいため武漢周辺の料理を出す学食だけでなくウイグル自治区の料理を提供する学食もあった。この辺りは留学生が多い大学ならではの対応であると考えられる。また日本のように部活やサークルという意識は低く同じスポーツを好む学生が集まって自由にスポーツを楽しんでいるように感じられた。余談ではあるが、ここで日本と中国の違いを大きく感じたのは部活動についてである。日本では中学校、高校、大学と部活動の存在が強く誰しもが経験しているだろう。この部活という制度は少し強制じみた側面が強く学生、指導教員共に疲労が大きいというデメリットが強い反面、部活動でその競技への理解や関心を大きく深められるという利点がありこの利点は私たちが想像するよりも遥かに大

きいという点である。今回滞在中私は何度か学生とバレーボールをした。その中には私よりはるかに多くの年数バレーボールをしていた学生もいたがレベル的には日本では中学生レベルに近い。日本ではいかに学生時代に恵まれた環境で部活動を通してスポーツに打ち込みながら身体を鍛えることができていたかということを実感した。

武漢大学は人民病院、中南病院を有しておりそこで学生たちは臨床実習を行っている。今回の留学でこれらの病院を見学させていただけたがその詳細は後述する。



(写真3 医学部 東門)

### 3.学習

武漢大学で私は解剖学口座にお世話になった。ここでは私は留学生用の授業カリキュラムを渡され自由に参加してよいという方式で様々な解剖学の授業に参加させていただいた。参加したのは主に二年生の解剖学実習であり、これは英語で授業が行われるということ以外は手順や内容に大きな相違はなかった。私たちが忘れかけていた解剖の知識を英単語と共に思い出すという来年度からの実習に向けた良い復習の機会となった。余談だが参加した授業の中では私たちはすでにある程度の知識を有しているということもあり学生たちに時折教えるという役割をいただいたが、やはり自身の英語力の低さを痛感する場面が多々あった。このような経験からも自身が将来海外で研究する場面があるとするならばやはり最低限英語は習得していなければ話にならないことを再認識すると共に自身の英語力を向上させようとするモチベーションにつながった。以下参加した実習や見学させていただいた施設の中で特に印象強いことを記す。なおいかに送付される写真は指導して下さった教員に事前に許可を得ておりかつ倫理的な問題となりそうにないと判断したものも載せさせていただく。



(写真4 解剖学講座のビル)



(写真5 解剖学講座でお借りしていた部屋)

#### ・解剖学実習(二年生時)

前述したとおり主に二年生が行っている授業である。方式は日本と大きな差はなく学生が自身で解剖を進めていく。ここでも自身の大学との相違点は感じた。一つは一体の標本に対する学生数である。私たちの大学では通常4人で一体の標本を用いて学習を進めるが武漢大学では人数が多いことから一体あたり7-8人ほどで行っている。そのため中にはほとんど標本を解剖することなく終える学生もいる。このような事から生徒の理解が浅いまま終わることが無いようかなりの頻度でそれこそ1部位が終わるごとに口頭試問を行っているようであった。確かに人数が少ないと一人一人の負担が大きいとその分深い理解を得られる利点が大いなのだと感じた。また学生の理解を深めるための工夫として解剖前の説明である。私たちは解剖学実習の教本を事前に学習しそれに基づいて手探りで進める場面が多かったが武漢大学では始まる前に事細く説明する。これは人数が多いが故の配慮のように感じられた。

#### ・解剖学実習(一年生時)

武漢大学では一年生時、事前に部位ごとに見るべき部分が剖出されている標本を用いて実際に触り観察しながら人体への理解を深めていた。その後に二年生となってから実際の人体を自分で剖出しながら人体の構造を学ぶようであった。福島県立医科大学では一年生時に人体を実際に見ることはなく二年生時に実際の標本を使い教科書の知識のみで自身で見たい部位を剖出する。これは事前学習を促す意味や自身で試行錯誤しながら進めることで強く印象に残し人体への理解を深めるという点では優れているが、しかし知識が浅いがゆえに確認しなくてはいけない構造を壊してしまうこともある。このような点からも一年生時に実際の構造を確認しその知識をもとに解剖を進めることで医学的知識に触れている意識により学習へのモチベーションを高く保つことができると共に正しい構造及び個体ごとにある奇形を確認しながら進めることができる。これは解剖をする際、人数が多く日本のように一人ひとりが十分な時間実習ができないような武漢大学の環境に適した配慮である

ように感じられた。

#### ・骨学自習

スケッチをするという点を除いて私たちの大学と相違点はない。しかしここで印象深かったのは授業で使われるモニター（写真6）である。このモニターはタッチパネル搭載で自身のみ覚悟から観察できる。また骨をパーツごとに分解して観察できるためより立体構造を把握しやすい。自身も骨の構造や脳の構造を学ぶ際どうしても理解しにくい部有分があり苦労した経験があるが故にモニターを有用さに感動すら覚えた。このモニターには武漢大学にいらした小島先生も絶賛されていた。



（写真6 モニター）

#### ・処理室

この施設では提供されたご遺体を授業で使用できるように固定する作業を行っていた。

武漢大学には年間 20-30 人ほどの遺体提供があり現在 50 体ほどのご遺体が保有されている。薬品や作り方は大体日本と同じでホルマリンを用いた固定方法であった。ここで興味深かったのは血液を薬品に置換する装置だった。自身が想像していたよりもはるかに簡素で点滴と同じ原理を用いて置換しているようであった。話には聞いたことがあったが実物を日本ではみた事がなく大変興味深かった。また日本に帰ったら日本の装置と比較していたい。



（写真7, 8 標本製作時使用する機材）

#### 4. 病院見学

私たちは今回の留学でご厚意に甘えお忙しい中何度も病院見学させていただくことができた。初めに見学させていただけた病院について簡単に紹介する。

##### ・人民病院

武漢市内でもかなり大規模な病院であり学生の研修にも使われる。CTやMRIなど機材がかなりの台数有そろっているがそれらをフル稼働させても対応が間に合っていないほどの患者が来るというお話だった。

年間患者数 4400000 人 中国国内で7位。

外来患者数(病院全体) 6000~8000 人/日 整形外科では一日 60~70 人ほどの診察行うらしい

手術件数 年間 80000 件 若手の医師の場合一日 10 件以上を受け持つ。

ナース一人当たり 6~7 床を受け持つ。

一日の入院費 平均 800 元/日

ベッド数 4000 床

総従業員 5100 人 それでも足りないというお話だった。

人民病院で整形外科および泌尿器外科を見学させていただけた。整形外科では病棟見学および数件の外科手術を見学できた。私たちはまだ臨床実習を日本で行っていないため実際の患者や手術を見学させていただけたのは新鮮な経験であったと共に自身が今まで学んできたことがどのように臨床現場で生かされているのかを学ぶ良い機会となった。特に大腿頸部骨折の患者の対応や治療法、術後のケアは日本に通ずるところもあり非常に興味深かった。泌尿器外科でも同様に4~5件ほどの手術を見学させていただけた。泌尿器外科では主におけるマイクロスコープを用いた尿路結石および回復手術で行うアデノーマ摘出術、清掃静脈瘤の手術を見学した。どれも知識としては知っていたが実際の手術現場やマイクロスコープを使う場面みた事がなかったため自分たちが得た知識がどのような場面で役立つのかを確認でき、臨床実習で医学知識を学んでいくモチベーションとなった。特に内視鏡の手術は狭い視野の中画面内の情報だけを頼りに構造を理解しなくてはならないため解剖学の深い知識が必要となることを再認識した。

またこの病院では和栗先生と小島先生が中国にいらした際講義された病院であり私たちも講義に参加した。お二方の講義内容は英語であることに加え一部内容が難しいものがあり私の理解が追い付かなかった。一方一緒に講義を受けていた中国の学生の方々は深く理解していると共に英語で質疑応答を交わしており自身の不甲斐なさを実感させられる機会となった。確かに中国と日本の大学生の英語能力は大差ないのかもしれないが研究課程に進もうとするレベルになると日本と中国の英語能力の差は大きく広がる。やはり将来的に研究職に就くのであれば英語能力は必須であると実感させられた。



(写真 9, 10 人民病院で講義されている先生方)

この病院の手術室で興味深かった点は手術室の集まる場所の一部が食堂になっている点である。通常日本では手術室の近くに食堂があるといったことはなかなか考えられないが中国では一日の手術件数が日本に比べはるかに多く休憩時間が少ないことから手術室の近くに手術着を着替える必要なく利用できる食堂がある。利便性が高いと感じると共にいかに中国の外科医が過酷な状況で働いているかがわかった。



(写真 11 人民病院)



(写真 12 病院内)

#### ・中南病院

武漢大学に所属する病院の一つ。最も武漢キャンパスから近い。

面積 279000 平方メートル

ベッド数 3300

外来患者数 10000 人/日

入院患者数 2300 人

この病院で神経内科および福島県立医科大学の先生方と共に泌尿器科を見学させてもらった。泌尿器科は前立腺癌手術週に 60 件(一日当たり 10 件)あることなどから規模の違いを感じる。また神経内科ではベッドサイドでの診察やDSAなどの検査機器を用いた検査の見学させてもらった。特にベッドサイドでの診察は最近学んだ日本の OSCE の手順と類似しておりどのように自身の学習が生かされているかが分かった。

加えてこの病院で興味深い制度が入院患者と外来患者で訪れる建物が違うことである。これにより大勢来る患者たちの対応をしているがそれでも日本に比べ患者が多すぎて圧迫感を感じる。

病棟見学の際に中国の医療状況や入院事情、保険制度についてのお話を聞いた。

#### ・入院事情

中国では上述したように入院費は一日平均で 800 元であり日本円で考えたら安いのが中国での物価を考えるとかなり高額に思われる。また患者数が多すぎるため部屋があいておらず部屋があくまで廊下にベッドを出しそこで入院生活を送っている人たちがほぼすべての科に存在する。その様子はまるで戦時の様であると先生もおっしゃっていた。

#### ・医療事情

中国では現在大病院に患者が集中してしまい対応が追い付いていないとい問題を抱えている。外科手術なども日本に比べ明らかに多く私たち見学させていただいた日も 6 件ほど手術があった。また患者が一家所の病院に集まってしまうことの原因も教えていただいた。

医師のお話によると中国は日本以上に自由に病院を選べるため皆が良い治療を受けようとして大病院へ行く。病院で小さい病院を受診するように促しても国民は聞き入れず大病院へと足を運ぶらしい。日本では予約制や大病院では紹介状がない場合治療費が高くなるという制度により多少は緩和されているが中国ではこのような制度があまり機能していないため一極集中に加え日本よりはるかに多い人口という条件、そこに我を押し通す国民性が加わりこのような結果を招いているように感じられた。しかしこれは日本でも決して他人事ではなく病院を自由に選べる権利がある以上患者数が増加すれば起こりうる事態であるように思う。中国、日本共に家庭医という概念がもう少し見直されるべきであるように感じられた。

#### ・保険事情と医療費

中国の保険事情について

中国では国民皆保険制度がなく加入している医療保険は人によって様々である。また疾患の種類によっても負担額は大きく異なる。以下中国の保険について説明する。

以下引用分である。

「中国医療保険の償還制度 中国の医療保険は、外来と入院で対応が違っている。医療費の無駄使いを防ぐ為に、日本の 制度に学んで、外来の保険償還と入院の保険償還が区別されている。「都市労働者基本医療保険」「都市住民基本医療保険」と「新型農村医療保険」のそれぞれの仕組みについて説明する。

「都市労働者基本医療保険」では、外来の保険償還は、医療保険料の個人が負担している掛け金を個人の口座に積み立て貯金をしており（省によって、企業が拠出している10%の中から1～2%を個人の口座に加えている）、この範囲で償還されている。入院の保険償還は、企業が拠出した保険金を集めた基金から償還される仕組みになっている。従って外来の保険償還は、自分の口座の積立金がなくなれば、それ以後の医療費は全額自己負担になる。逆に自分の口座に多くの残額がある場合、両親や子供の為に使用する事もできる。入院での費用負担は、基金が支払う為、安心して治療が受けられる。

「都市住民基本医療保険」では、被保険者は3つの病院と1つの地域コミュニティセンターを選んで、自分の指定病院として登録する。外来診察の時は、最初に地域コミュニティセンターを受診するように決められている。年間の自己負担の支払い限度額は600円でそれ以上支払う事はない。国の負担割合は50%で天井ライン（年間国の負担する限度額）は2000元。」

（引用 <http://www.johokiko.co.jp/ebook/BA121205.pdf> 最終アクセス日 2017/3/10）

上記の支払い方式に加え医療保険によって使用できる薬剤にも制限がかかる。このような性質上問題も発生している。中国の国民はすべての人が医療費を満足に払えるほど裕福ではない。確かに日本でもそうではあるが日本では社会保障制度が十分に機能しているため保険対象外の治療でない限り受けたい治療をお金の問題で受けられないということはありません。しかし中国、特に経済の発展していない西の方では国民が多すぎて社会保障が十分でないことを相まって十分な治療を受けることができない人が大勢いるというお話だった。医療費を支払えない患者に対応するため、医療費を抑えるために機材を自作するなどの工夫が取られていた。日本においてこのような事態が起きにくいことがいかに患者にとっても医師にとっても恵まれているのか考える良い機会となった。近年医療費の高騰が問題となっているがある種日本のように完成された社会保障制度上仕方のない部分もあるのだろう。いかに今ある制度と十分に治療を受けられる環境のバランスをとっていくかが重要に感じられた。

勿論中国の医療制度について日本でも学ぶべき点はある。中国では救急車は有料であり料金は一律200元距離を10km超えると少し高くなる。またドクターヘリもあるがこれはかなり高額らしい。これにより不要な案件で救急車が出動することが少なく街中でも日本と比べ救急車を見る機会が少ない。日本も一度救急車の制度を見直すべきではないだろうか。

## 5.日常生活

私たちは武漢での日常生活において日本では経験できないような文化の違いを数多く経験してきた。特に印象深いことについて述べる。

### ・住居

私たちは迎賓館という学内にある留学生用の学生寮でお世話になった。学内にこのような大規模な寮があることも驚きだがそれ以上に生活設備の不十分さに驚いた。初日から排水溝がつまりシャワーを使えないという事態や備え付けの電気ポットを使用しただけでコンセントのヒューズがとぶこと、通信環境が不安定で一週間ほど連絡が取れなくなる事など様々な不具合がほぼ毎週のように経験できた。次回中国に留学に行く自室で wifi を満足に使えると思わない方がいい。いかに日本の住居環境が恵まれており私たちはそれに気づいていないかを思い知る良い経験となった。



(写真 13 迎賓館 部屋)

#### ・食事

武漢は中国南部の中心付近に位置しているため中国各地の料理が集まってきており様々な味を楽しめる。その中でも特に四川料理の影響が強く普段我々が食べている中国料理とは少し味付けや食材が異なる。おそらく普段我々が食している中国料理は上海の影響が強いのだと思う。中国の料理で共通している特徴として香辛料が聞いていることのほかに全て油が多く使われていることがあげられる。日本と中国では人種的にかなり似ているがこのような食事という環境因子により罹患する疾患に多少違いが出そうであり、そのことについては今後機会があれば調べてみたい。

中国では日本で考えられないほど食事に関して物価が安い。量や質を考えても日本円では 700-800 円しそうな食事ですら 200 円ほどで食べられる。果物や酒類も比較的安く得られる。中国では日本に比べかなり所得が低いながらも十分な生活を送れる理由が分かった。しかし一方でスマートフォンや電子機器特に海外製品は私たちの目から見ても高く、日本と大差ない。中国の方からみたらどれほど高額なものに見えるか想像するのは容易である。中国ではこのように生活必需品(食料など)は安いがそれ以外はかなり高額であり最低限の生活を送るのに必要な金額と少し裕福な生活をするのに必要な金額には日本よりはるかに大きな差があるように感じられた。なお余談だが日本の明治チョコレートも売っているが値段は 19 元と高く贅沢しなければ 2 食分の値段に相当する。

その他印象深い料理については写真を含め下記で紹介する。



←(写真 14 八鶏炒飯)

日本の炒飯と味は異なるが大変おいしい。値段も日本円で215円と安い



(写真 15 火鍋)→

武漢における日本の寿司に相当する料理。他国から客人が来た際にご馳走することが多いらしい。日本のしゃぶしゃぶに近い

#### ・交通

中国では学生は主にバス、地下鉄、自転車(電動を含む)を利用している。

バスや電車は公共の乗り物であるため値段がかなり安く特にバスは日本と違い一律二元で目的地まで乗ることができる。また地下鉄も降りる駅によるが2~4元(日本円で100円未満)で目的地にたどり着ける。このように中国では公共のものは日本よりはるかに利用しやすい印象を受けた。また自転車は街中にレンタルできる自転車(写真 17)が置いてあり、銀行のカードさえ持っていれば利用したいときに簡単に利用でき重要な移動手段となっている。



←(写真 16 電動自転車)

多くの武漢市民が利用している。音がしないため歩行時かなり危険である。



↑(写真 17 レンタル自転車)

街中にあり事前に登録すれば好きなときに利用可能。また目的地で乗り捨てすることができ元の場所に返す必要がない

交通の面でも様々な相違点があった。一つは地下鉄である。地下鉄ではすべての場所において必ず空港のような荷物検査が行われている。これによりかつて日本でかつて起きた地下鉄サリン事件のようなことを未然に防げるが場所によってはこの検査が原因で大混雑が起きていた。安全と利便性のバランスの難しさを感じる。

また今回の留学で長距離移動のために新幹線も利用した。中国の新幹線は規模が大きくまるで日本の空港のようであった。しかし大きさをもってしても一度に新幹線ホームは混雑しており改めて中国と日本の人口比を思い知らされると共にかつて中国で一人っ子政策が行われた理由を少し理解できた気がする。もう一つはバスの運転を含めた交通状況にある。バスは地下鉄同様にむしろ地下鉄よりも安価であり必要な交通手段となっている。バスは距離に関係なく1~2元ほどで目的地までたどり着くことができる。しかしバスに乗車すると気づくが日本と武漢では明らかに交通状況が異なる。特に私たち武漢にたどり着いたとき驚いたのはクラクションである。日本では不必要にクラクションをならすことはマナー的にも許されざることではあるが武漢ではクラクションがあたかも車両が通る合図であるかのように鳴らす。また武漢内は街中の道路が混雑しており日本であれば考えられないような割り込みや信号無視が多発しており譲りあいという概念がないのかと疑うほど危険な走行が目につく。これもクラクションが多く使用される原因の一つであろうであろう。またクラクションが過度に使用される原因として歩行者のマナーも原因の一つであると考察できる。武漢市内では歩行者や軽車両の悪質な信号無視が目立つ。また横断歩道がないような大通りですら歩行者はさも当然であるかのようにわたる。このことについて中国人の友人に聞いてところ



↑(写真 18 地下鉄 荷物検査)

確かに問題として認識しているが大勢の人が渡っている以上自身も渡ってしまうと話していた。このような歩行者による危険な横断も自動車がクラクションを合図として不必要に鳴らす要因となっているのだろう。なお我々も留学初週はクラクションに対し驚きとストレスを感じていたが終わるころには合図程度の認識となっていた。

上記のような交通マナーについての興味深い記事が掲載されていたため少し紹介する。

「ドライバーが交通マナーやルールを守らないことには、歩行者も慣れっこになっている。歩行者は車と道を争うような場合にはトラブルを避けるため自ら道を譲るが、少しでも隙間があれば車の間に割り込み、赤信号でも構わず横断する。今や信号や横断歩道はほとんど意味を失ってしまっている。

多くのドライバーや歩行者がこんな状態なので、元々は交通ルールを守ろうと考えていた人たちも、現実に合わせてざるを得なくなっている。ネット上で、あるユーザーが「高尚なドライバーがどのように墮落したか」と題した文章を投稿し、話題になっている。この文章には中国のドライバーの悪習慣が次のように描かれている。「アクセルを吹かし続け、万一のケースでない限りブレーキは絶対に踏まない。隙があれば割り込み、前の車は常に追い越し、人を見ればクラクションを鳴らす。窓からごみを捨て、痰を吐く…」」。作者は「昔は自分もこうした行為を嫌っていた。でも、運転しているうちに自分もこんな風になってしまった。これこそが、中国の正常なドライバーの姿なんだ。こうでなければ、他のドライバーから『お前、頭大丈夫か?!』と非難される」と綴っている。」

(引用 <http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=61943> 中国のドライバーはなぜクラクションを鳴らしまくるのか—SP紙 最終アクセス日 2017/3/6)

上記の記事に関してはまた後程考察する。

#### ・衛生面

私が特に生活していて感じた日本と中国の相違点は衛生面にある。中国ではトイレは勿論のこと食事をするレストランですら衛生環境はかなり悪い。食事処ではテーブルや床が汚れていることは勿論料理が提供される皿やトレイもひどく汚れており時には食器が割れており料理内に含まれていたこともあった。加えて中国では食べた鶏肉の骨や魚の骨をテーブルの上に放置する習慣がある。このような食事マナーも衛生環境悪化の要因であろう。中国では食事処の衛生レベルを三段階に分けているが多くは最低評価の場所が多かつ



(写真 18 衛生レベル)

た印象が強い。

トイレは新設された建物を除き故障していることが多く使用後に水を流すことができない施設も多い。またトイレトペーパーは自身で持ち込む必要があり、この理由について中国人の友人に聞いたところ無料で設置しておくトイレットペーパーが持ち帰られてしまうからではないかという話だった。

また道路に関しても日本とは大きく違う。日本では一部の川や山を除いて道路にゴミが大量に放置されていることは少ないが武漢では高頻度で見られた。またゴミ以上に気になったのは痰吐きである。武漢では特に中～高年層において痰吐きを道端にする人が多い。マナーが特に悪い人物に至っては電車やバスといった公共の場ですら行う。これについて興味深い記事があった。

以下その記事の引用である。

「大都市の繁華街でこそ少なくなったとはいえ、いまだに中国のいたるところで痰を吐く姿は目につく。実は中国人もこの悪習を改めようと戦いを続けている。1985年に北京市は罰金制度を設けた。2003年のSARS流行時には上海市は200元（約3000円）もの高額な罰金を設定したが、これらの対策も痰吐きを根絶することは出来なかった。

復旦大学社会発展公共政策学院の于海（ユー・ハイ）副教授は痰吐きの悪習が残る背景には、中国人が公共空間の保持に対し責任感を欠いていることが背景にあると指摘する。自宅など自身の空間はきれいに保っても、共有の公共空間を守る意識がなく平気でポイ捨てや痰吐きができるというのだ。さらに「「他人がやっているので自分がやっても大丈夫」、むしろ「やらないと損だ」といった集団心理が働いているとの指摘もある。」

(引用 <http://blogs.yahoo.co.jp/deliciousicecoffee/29398646.html> <痰吐き>悪名高い「マナー違反」、根絶できぬ背景とは？—中国 最終アクセス日 2017/3/6)

私は以上の記事およびクラクション委ついでの記事から以下を考察する。確かに法律も整備されているがそれがあまり意味をなしていないことからやはり習慣を大きく変えられるのは法律でなく人の常識および倫理観ではないだろうか。どんな良い法律をつくっても国民の中身特に倫理観が変わらなければ意味をなさないのだろう。これは日本も例外ではない。常に社会の常識は変化し続けている。事実我々もスマートフォンの登場により数年前から劇的に変化したマナーや倫理観が多くある。もちろん医療の現場においても近年IPS細胞関連の登場により倫理観が変わらないとは言い切れない。このように変わっていく社会と倫理観の中で正しい判断をし続けることは大変難しく場合によっては以前まで正しかった倫理観すら社会の変化によって誤ったものとされる危険性すら考えられる。そのような変化の中でも何が正しいのか考え続ける力を養うことが大切であり、また時には自己主張を強め意見を強さを身に付ける必要もあると思う。なお中国で私たちと近い年齢の学生は痰吐きをあまりしないことから徐々に中国内におけるマナーへの意識の変遷を感

じられる。

このように衛生面ではいまだに多くの課題を持っていると思われる。逆に言えば、日本は長寿大国と呼ばれているがその要因としてももちろん充実した医療環境や社会保障制度の存在が大きいですが、日常生活における高度に保たれた衛生環境も強く影響されているのではないかと思います。この点に関しては機会があれば中国の衛生面と日本の衛生面の違いによる疾患の発生率の違いやその疾患の種類、原因について調べてみたい。

#### ・大気

私が生活中衛生面以外で気になったのはやはり大気汚染であった。武漢市内では日によっても異なるが多くの場合大気汚染が原因で遠くのビルはひどく霞んで見える。特にひどいときは近くから見上げるビルすら頂上付近はかすんで見える。中国の大気汚染問題を実感すると共に呼吸器疾患との関係に興味を持った。



(写真 19 大気)

#### ・その他

中国市内で生活していると日本の中国への影響力を感じる場面が多々あった。特に商店ではその影響が強い。中国では品質の良さをアピールするのに日本の商品であるかのように売り出されることが多い。特に「メイソウ」という商店ではその傾向を強く感じられた。代表取締役が日本人らしく安くて品質の良い商品という宣伝のためパッケージに日本語を表記しかつ輸入品であるかのような細工がしてある。海外から見た日本の印象を再認識できた。なお下にも写真を載せるが表記されている日本語は私達から見るとかなり違和感を覚えるものが多い。

写真では確認しづらいが常時かすんで霧がかかったように見える

## 6.交流

私たちは武漢大学留学中多くの方に助けをもらいながら生活していた。武漢で出会った一部の人たちについて紹介する。

#### ・解剖学講座の先生方

私は前述したよう解剖学講座でお世話になった。解剖学講座では教授の田宗文先生を始め四人ほど教授がいらっしやり、学生たちに分野ごとに解剖学を指導されていた。また多くの方が福島県立医科大学への留学経験をお持ちであり、その時に大変良くしてもらい感謝しているというお話を何人もの先生がおっしゃっていた。そのため我々学生に対しても大変優しく親切に接してくださった。このような場面からも福島県立医科大学と武漢大学の

信頼関係の強さを感じると共に、武漢大学との信頼関係を留学の受け入れという形で築きあげていた福島県立医科大学の先生方に感謝を申し上げたい。



(写真 20 解剖学の先生方)

- ・お世話になった講座に所属する学生

私たちは武漢大学滞在中多くの学生に身の回りの手助けをして貰った。また彼らには私たちの時間があるとき武漢大学のメインキャンパスや東湖公園、黄鶴桜など武漢市内の様々な観光スポット並びに武漢大学周辺の料理店などを紹介してくれた。彼らは英語を流暢に用いて私たちと積極的に交流してくれて、彼らの手助けがあったからこそ武漢大学での一か月間を無事にかつ充実して送ることができたのだと思う。このことに関して深く感謝を述べたいと共に自身が逆の立場となったときいかに留学生と交流すべきかを考える良い機会となった。



(写真 21,22 お世話になった学生)

- ・福島県立医科大学に留学に来ていた学生 6名

私たちは武漢大学で昨年の10月ごろより福島県立医科大学に留学していた学生6名とも

再び交流した。このとき日本でいうお寿司に当たる武漢市内の食事(火鍋 ホットポット)を紹介してもらい一緒に食事を楽しんだ。また地下鉄やバスといった武漢市内の移動手段の利用方法も教えてもらえ以後私たちの生活の質の向上につながった。私たちが日本に入り時は私たちの英語力が低いこともあり大した力になれなかったことを反省すると共に彼らの力になれなかった代わりに次年度武漢大学から福島県立医科大学に来るだろう留学生の力になれば良いと思う。

#### ・武漢大学の一年生

私たちは解剖学講座の先生にご紹介していただき武漢大学の一年生とも交流した。武漢大学の一年生へ日本および福島について含めた自己紹介を行ったが、このとき予想以上に中国の方の日本への関心が高いこと、またに日本のアニメが私たちの想像よりはるかに世界中に幅広く普及していることを知った。中には日本のアニメの曲をほぼ完璧に熱唱できる学生もいた事には大変驚いた。武漢大学の一年生と自己紹介した後日万通寺へ一緒に行き、その中でも私たちが特に親交を深めたS君とは一緒に上海旅行へ行ったり、何度か食事をしたりする仲となった。



(写真 23 S君)



(写真 24 武漢大学一年生)

#### ・他国からの留学生

武漢大学医学部への留学生は半数以上がインド人であるが、もちろん他国からの留学生も多くマレーシアやタイをはじめとしたアジア諸国やイギリス、ロシアなど欧米から来ている留学生もおり中国にいながら様々な国の考え方や価値観に触れ合うことができた。また彼女らとは一緒に食事に行くだけでなく自宅に誘っていただき手料理をふるまっていた。このように様々な国の学生と交流できるのは武漢大学のような総合大学強みであり私たちの大学ではなかなか経験できない貴重な時間を過ごすことができたと思う。



(写真 25,26 他国からの留学生)

#### ・病院の先生方

今回の留学では私たちも何度も病院を見学させていただき病院で働く先生方とも深く交流できた。その中には日本に 7 年留学していた先生もおり私たちに日本語で中国人から見た日本語と中国人の違いと類似点を教えていただいた。このお話に関しては後程私を感じた中国人と日本人の相違点と類似点についてと共に紹介したい。

また泌尿器科の先生方および博士課程の学生とは小島先生、和栗先生とご一緒させていただいた食事の際に交流し、後日泌尿器科の先生には病院を案内していただいた。



(写真 27 整形外科の先生方)

#### ・武漢大学日本人会の皆さん

武漢大学医学部キャンパスに日本人は私達のみであったがメインキャンパスには 30 人ほどの日本人留学生もおり彼らとも交流した。話を聞くと語学関係の学部のみならず経済学部や総合化学部など幅広く、武漢大学の規模の大きさを改めて実感した。日本人会の多くの方は 1~2 年ほどの留学らしく、私達とは違い中国の生活により密着しており日本人として長く滞在した結果見える中国の様子や武漢大学で行われている行事など興味深い話を聞かせてもらった。また中国語がほとんど話せない我々と違い中国語が流暢であり様々な場面で助けてもらえたことに深い感謝を述べたい。

武漢大学に留学していた日本人は多くが西日本出身であり普段日本で生活しているだけでおそらく関わりがなかったであろう。このように他国への留学を通して普通では関わらないような離れた地域に住む日本人と留学を通して知り合い自身の知らなかった新たな日本の一面を知ることができるのも留学の魅力の一つではないかと思う。余談ではあるが私の言語の訛りはひどいらしくかなり笑われた。



(写真 28 日本人会の皆さん)

## 7.観光

私達は武漢大学に留学中、中国人の友人たちと様々な観光スポットへ行った。その中から一部を紹介したい。

### ・黄鶴楼

黄鶴楼は、現在の中華人民共和国武漢市武昌区にかつて存在した楼閣。現在はほぼ同位置に再建された楼閣がある。武漢随一の観光地であり、中国の「江南三大名楼」のひとつであり、また李白の代表的な漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」や崔顥の「黄鶴楼」にてその名を知られている。現在の黄鶴楼は19世紀当時の姿を参考にして1985年に再建されたもので、高さは約51.4メートルある。黄鶴楼の最上階からは武漢市内を見渡せ、長江および長江大橋も一望できる。



(写真 29 黄鶴楼)

### ・武漢長江大橋

武漢長江大橋は湖北省武漢市にある武昌蛇山と漢陽龜山にまたがってかかっている長江で初めての鉄道・道路両用の橋。橋の全長は1670m、橋梁部分の長さは1156mで、橋桁まで北岸303m、南岸211mある。橋は二層に分かれており、上は道路で下は2本の列車がすれ違う複線の鉄道となっている。橋の両端に35mの民族スタイルの装飾建築がほどこされており、橋の下部には上の道路へ直行できるエレベーターが設置されている。橋に立ち、東へ悠々と流れている長江を眺めると、武漢三鎮を一望できる。

### ・東湖公園

東湖は湖北省武漢市武昌区の北部にある湖。ここの面積は 73 平方キロメートルでその中の東湖の面積は 33 平方キロメートルある。ここは特色ある 6 つの部分に分かれていて、听涛軒、磨山区、洛洪区、落雁区、吹笛区そしてまだ完成していないが白馬区である。東湖には 100 以上の観光スポット、33 平方キロメートルの広大な水域、12 個大小の湖、112 キロメートルの曲がりくねった湖岸があり観光スポット有名であるが、ピクニックや子供の遊び場としても住民に利用されている。行吟閣、梨園、竹園、蓮池などが西岸にあり広大穴つくりとなっており徒歩で全て回ることは難しい。東湖桜花園（とうこおうかえん）は武漢東湖磨山桜園とも呼ばれ、東湖地区にある桜の名所になっているとの話だった。毎年 3 月と 4 月に東湖桜花園で年に一度の桜祭りが開かれるらしい。

また我々は今回武漢周辺のみでなく上海にも赴いた。

上海は中国の友達が口をそろえて言うように日本の東京のようであった。全体的に武漢と比べ物価は高いがその代わり町は整備され衛生面もかなりよく、また多くの観光客が国外からくることもありマナーも非常に良かった（例えば痰吐きが少ない、車のクラクションをほとんど聞かないことが多い、等）。ここで私は日本同様やはり同じ国の国民であっても文化、環境によりマナーの質は大きく異なるということ再認識した。このような大都市からのマナー改革がだんだんと国全体に広がっていくことで人々のマナーが向上されひいては衛生環境の向上につながるのだと思った。また上海で感じたのは中国から見た日本である。しばしば我々日本人は他のアジア国から見て全員が日本人というだけで裕福と考えられるという話を聞くことがあったがそれが事実であることを強く感じた。各観光地のキャッチは観光客とみるとまず日本語で話しかけてくる。そしてこちらが思わず反応すると巧みに日本語を使い商品の宣伝を始める。これを一日に数えきれないほど体験した。中国の観光地への日本人観光客の影響力および他国から見た印象を実体験できる良い機会となった。

ここからは上海に内の各観光地の軽い紹介を行う。

#### ・外灘(ワイナン)

中国・上海市中心部の黄浦区にある、上海随一の観光エリアである。黄浦江西岸を走る中山東一路沿い、全長 1.1km ほどの地域を指す。かつてのイギリス租界。今でもイギリスの名残を残しており中国でありながら他国の風景を味わえる場所であった。また川を挟んだ対岸にはモダンな高層ビルが数多く建てられていた。これらは地震のおおい日本では建てられそうにない奇抜なデザインが多く、まるで年々急激に発展していく中国のあり方を表しているかのようにすら感じられた。



(写真 30 外灘)

・豫園(ヨエン)

中華人民共和国上海市黄浦区安仁街に位置する明代の庭園。現在も過去の中国の建築様式が残る観光スポットである。中国古来の庭園があり、ここでは日本のかつての建築様式やはり中国に大きく影響を受けているという点を感じられる。確かに多少の違いはあるが屋敷のつくりや屋敷内の庭の配置、部屋の間取りなど共通するものを感じた。周辺は中華的な高層建築物が並んでおり、観光地として豫園商城と呼ばれている。お土産物店や飲食店が軒を連ね、小籠包の本家を名乗る南翔饅頭店などがある。またほかの地域同様日本人への客引き行為が大変激しく注意が必要であった。もし機会があればどのような点で我々を日本人と判断したのか聞いてみたい。



(写真 31, 32 豫園)

・上海動物園

動物園の規模は日本よりはるかに大きくまた展示方法も少し異なる。特に鳥類の展示エリアは日本とは大きく異なっていた。いくつかの鳥類は放し飼いされており檻に囲まれたエリアにいなかった。また蛇のケースの内にはネズミが餌として放たれており運が良ければ捕食シーンを見られる。これは日本のように過度なクレームやそれに過敏に反応してしまうようではできない自然な姿を見せる方法であると考えられる。

## 8.日本人と中国人の国民性

私は今回の留学で日本人と中国人の国民性について多数の違いがあると実感したと共に同じアジア人として共通する考え方をもつ民族であることも分かった。まずは相違点について話したい。

日本人と中国人の大きな相違点の一つは赤の他人への配慮にあると思う。これは私の偏見だが日本人の多くは幼少のころより近い友人、知人へ配慮することは勿論他者に迷惑をかけてはいけないと教わりながら生活してきた。そのためたとえ相手が赤の他人であってもそれなりの配慮をして気を使いつつ日常生活を送っている。しかし中国人は友人、知人に対する配慮や気遣いは行き届いており日本人と相違なく感じるが赤の他人となると全く対応が異なるように感じた。確かに日本でも一部の道徳心にかける行動をとる人がいることは否定できないが中国では少々強めに行動として表れている人が多い印象を受けた。身近に他者への配慮に関連して感じたのはレストランなどの料理店である。日本では多くの場合店員の接客は素晴らしく配慮されており、一部勘違いをした人もいるが多くの客もあまり横暴な態度はとらないといった双方の配慮が感じられる。しかし中国では少し異なり、一定以上の高級店でなければ店員も自身が忙しければ客の要望を無視し、一方で客も好きなだけ主張したり自身の使用したテーブルを平然と汚したまま席を立つなど配慮に欠ける行動が多いように思われた。加えて喫煙禁止と書かれたポスターの目の前で喫煙するなど日本では考えられない行動も目立った。一時期東京オリンピックが決定した際「おもてなし」というワードが流行したが確かにこのおもてなしの配慮や気遣いは普段日本にいるときは意識しないが日本ではかなりハイレベルにあるのだと実感した。ただここで留意しなくてはならない点はいくつかあり、上記は赤の他人に対するものであり、親しくなった友人や私たちのような客人に対するおもてなしの心は日本人以上に強いように思えた。親しくなった中国の友人は何度も食事をご馳走になったがその理由を聞くと中国では客人が来たら盛大にもてなすのが流儀であり食事の料金などもすべて支払うことが多々あるらしい。また食事の面だけでなく日常生活においても様々な場面で異国人である私たちの手助けをしてくれた。確かに中国では人口も多いため自分を主張し自身のために行動する傾向が強いかも知れない。しかしそれ以上に他者との協力関係を作るのがうまいと感じた。これは中国が最も規模の大きい国のひとつであり古来より様々な民族、文化と衝突してきたことに起因するのかも知れないと考えられる。私たち日本人はあまりを海に囲まれ他民族との交流が著しく少ない、したがって確かに他者に対し配慮した行動をとるがどこか距離を置こうとする傾

向がある。特に異なる民族、文化をもつ外国人に対してはその傾向が強いように感じられる。今後グローバル化が促される世界において私たちの考え方や態度も改めるべきであるように感じられた。

もう一つ感じた大きな相違点は自己主張の強さである。中国人は日本人に比べ自己主張がかなり強く日常生活や病院見学でそれを実感した。彼らは自身の考えを強く持ち可能な限り自分の意見を通そうと相手と議論し、自分の考えを主張せず話し合いが終わること少ないように感じられた。これは日本人に大きく欠けている考え方であり日本では他者に迷惑をかけないように生活してきたことから生まれた「空気を読む」という強迫じみた考え方により議論が交わされず、いわれた通りに行動する節が多いように思われる。確かに時には必要であるが、言われるがまま行動するだけではそれ以上に良い結果をもたらすこともなければ自身で考え行動する自立の力が養われることもない。私は上記のような自己主張する態度は日本人が今後自身を成長させるために必要な中国人から見習うべき重要な性質の一つであると思う。

次に日本人と中国人の類似点について話したいと思う。私がそれを強く感じたのは前述した人民病院の現場で働いている医師に中国人の働き方の話を聞いた時だった。私は日本でも中国でも必死に自分を犠牲にして働くことが是とされ休日を楽しむことを非とする自己犠牲の心美徳と考える人が多くかつそれが過度に行き過ぎている点があると感じた。留学に来る前、私は中国の働き方は大陸であることから欧米に近いのではないかと、日本とは違うのではないかと先入観を抱いていた。しかし話を聞くと特に医師は忙しいということもあり休日をあまり楽しむ暇もなく仕事に没頭しており中国人自身もそのことを危惧しているらしい。実際一日中毎日患者が押し寄せる病院では休む暇はなくお金はあっても旅行に行けないというお話だったがまさに日本のそれと同じであった。中国では日本と比べ 24 時間営業が少ないがそれでもやはり欧米のような余暇を楽しむ文化は薄いように感じられ、このような自身より仕事を優先する姿はアジア人として共通するものを感じた。なおこのような働き方では近年の日本同様うつ病のリスクも増大するのではないかと考えたがまさにその通りであった。

以下中国のうつ病に関連する記事である。

「中国人の精神疾患患者数は 1 億人以上。このうち、うつ病は 5,500 万人、重度精神障害は 1,600 万人といわれる。人民日報の Web 版である「人民網日本語版」が 2011 年 10 月に報じた統計データ（15 歳以上）によると、精神疾患の割合は 17%。うつ病が約 5%、不安障害が約 5%、薬物・アルコール依存症が約 5%、重度精神病は 1%とした。ややデータが古いが、現在はさらに増大していると推測できる。精神疾患に対する知識不足と対応できる医師やカウンセラーの絶対的な不足に加え、都市部と農村部との格差など多くの課題を抱えている。上海で EAP（従業員支援プログラム）事業を展開する上海馨励健康信息咨询有言会社の張正波 CEO に中国におけるうつ病の状況と対応策などを聞いた。

中国で社会問題となっているのは自殺者数の多さです。私が上海でメンタルヘルス事業を展開しようと考えたのも、自殺者を減少させる対策に取り組むためです。中国の自殺者数は年間で 35 万人、このうち、うつ病が原因とされているのが 25 万人といわれています。これを日本の自殺者数（年間約 27,000 人）と比較してみても、深刻な問題であることが分かります（中国の人口は日本の約 10 倍）。

うつ病を始めとする精神疾患の要因は多様だと思います。一般的には急速な経済発展の歪ととらえることができるでしょう。人件費は高くなり収入は増えていますが、製造業で 1 日平均 10.5 時間、土日も休まずに働いて得る収入です。しかし、物価も上昇しており、働いても安定感を得ることができない。やはり仕事への負担感が大きく、イライラ感を募らせてしまう。

さらに言えるのは、精神疾患に対する中国での捉え方に問題があると思います。日本でも同じ傾向はみられますが、精神的な病にかかる者は“愚か者”というレッテルを貼られてしまいます。非常に恥ずべき病であるという社会的評価が、他人の力に頼る考えを止め 1 人で悩む状況を作ってしまう。だから、うつ症状で気分が優れなくても誰にも相談しない。こうして徐々に悪化させ重症化してしまう。

日本では、うつ病が広く知られるようになりました。正しい認識があるのかどうかは別にしても社会で受け入れていかなければならないという考え方があります。その点で中国では、大半の国民がうつ病を知りません。精神疾患に対して悪いイメージしかもっていません。

習近平体制になってから、力を入れ始めています。2013 年 5 月に「精神衛生法」が施行されました。ここには、メンタルヘルスの推進と予防が条文に書かれており、患者への差別の禁止、強制的な入院措置などもあります。この考え方の基本は、精神疾患を抱える人が増え、同時に自殺者も増大している状況は、社会的不安を招くことにつながる。だから、心の健康を重視し社会の安定化を図るのが狙いです。病院は精神疾患の患者に対応する義務が生じたともいえます。見方を変えると重度な精神障がい者は、公安と協力して強制入院させるということです。いずれ企業にもメンタルヘルスの義務が課せられるとみています。

全国で登録されている精神科の医師は 2 万人弱、国民 10 万人あたりの精神科医師数は 1.46 人で、国際基準の 4 分の 1 にとどまっているというデータがあります。このように現状の中国では精神疾患医療サービスが著しく不足しています。ただ実際にはもっと少なく、精神科医は 5,000 人規模ではないでしょうか。このうち、西洋医学的な治療ができる医師、つまり抗うつ剤などを処方できるのは 2,000 人程度だと思います。もちろん、抗うつ剤を出せる医師がいることが、いいという話ではありません。

その多くは沿岸部の大都市に集中しており、農村部に行けば精神科医は、ほとんどいないはずです。聞いたことがない。2011年10月の「人民網日本語版」では、北京市衛生局長の話が伝わっています。それは、北京市の精神科医は1,000人にも満たない状態で、その原因として精神科医の道に進もうとする医学生が少なく、精神科医に対する偏見、他の診療科の医師と比べて収入が低い、ことなどを理由としてあげています」

(引用 うつ病が増大する中国の現状 自殺者数35万人で政府も対策強化に乗り出す 著者 海部隆太郎 <http://wedge.ismedia.jp/articles/-/3588?page=3>

最終アクセス日 2017/3/16)

以上の記事のように経済成長に伴い労働環境の変化、激化が生じていることや中国でもうつ病への偏見が強く大部分の国民がうつ病は恥ずべき病であり誰にも相談できないという点が日本と全く同じのように感じられた。これは国が近く互いに強く影響しあうということもあり、東アジアに住む民族の根底には同じような思想観があることを示唆しているのではないだろうか。このように経済成長を経ることで国が豊かになる一方で精神疾患がふえるという大きなデメリットが生じてしまうという現状を中国にきて改めて感じ、これらの変化する社会の中で同じように変化していく人々の生活や疾患の種類に対応していくことが我々医師には求められているのだと感じた。しかしこれは偏見ではあるが私達日本人から見てあまり抑圧さえていなように見える中国でさえこの現状であるのだから日本で陣が抱えるストレスは計り知れないのだと再認識した。

## 9.終わりに

私は今回の留学が初めて海外へいった経験であったということもあり文化や考え方、国民性の違いに驚愕してばかりであった。このような経験を通していかに自身の20数年間が視野の狭いものであったということを認識できるいい機会となった。また海外の生活を経験したことや海外からみた日本を知ることができたことで日本にいるときには気づかなかった日本人の性質や日本の強み、弱みというものを実感することができ、日本人の個性に対する理解を深められたと思う。私たちは将来医師となり数え入れないほど多くの個性に出会うだろう。それは日本人だけでなく外国人の個性と向き合う時が来るかもしれない。そのようなときに今回の留学で多少広がった視野を生かして患者と真剣に向き合えるよう努力していきたい。

最後に今回の留学のために尽力していただいた免疫学講座の関根先生、神経内科学講座の永福先生をはじめとし今日に至るまで武漢大学と有効な関係を築いてくださっていた福島県立医科大学の先生方にお礼に申し上げますと共に、留学の準備に尽力いただいた財務課の職員の皆さん並びに武漢大学で快く私たちを迎え入れてくださった先生方、学生の皆さんに感謝を申し上げて報告を終わりとす。

## 10.参照

武漢大学について 「Wuhan University」 <http://en.whu.edu.cn/>

人民病院について 「武漢大学人民病院 湖北省人民病院」 <http://www.rmhospital.com/>

観光地について 「ARACHINA」 <http://www.arachina.com/wuhan/attraction/dong-hu.htm>

武漢市について 「中国武漢市進出支援」 <http://www.wuhan-syspro.com/about/>